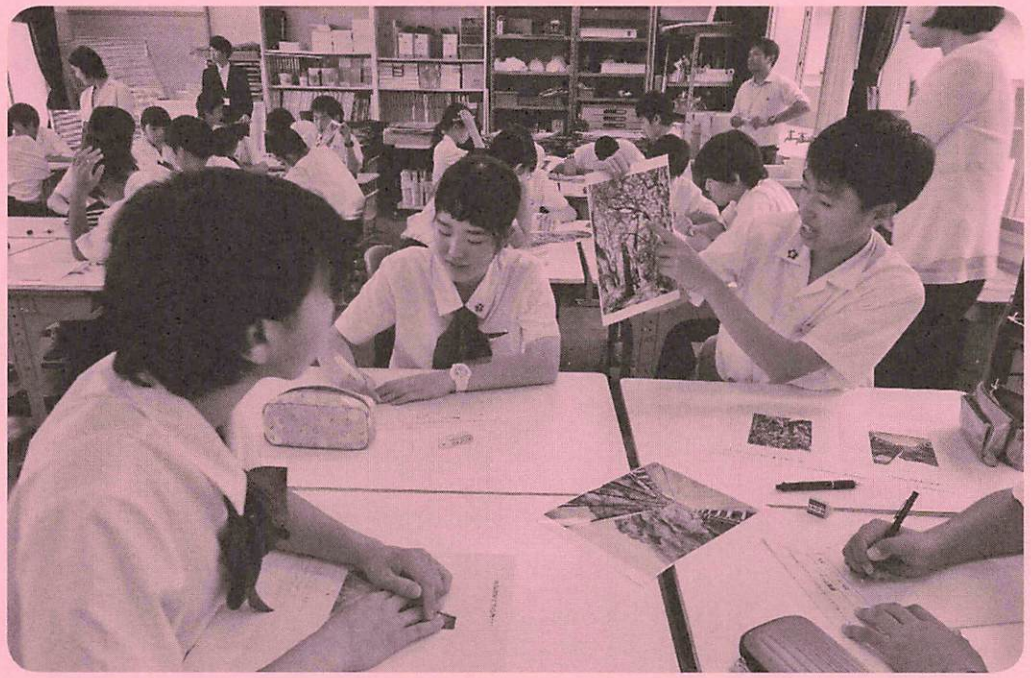
美術科

教科領域研究テーマ
【批判的に考え、互いに感性を刺激し合う
コミュニケーション力の育成】



美術科

批判的に考え，互いに感性を刺激し合うコミュニケーション力の育成

実　践　者　大川　博司
愛媛大学研究パートナー　秋山　敏行，福井　一真

第１章　はじめに

１　研究テーマ設定の理由について

これまで豊かな感性をはぐくませるために，感情やイメージというものを直感的にとらえさせる視覚的アプローチの研究に取り組んできた。互いに感性を刺激し合い，徐々に自尊心や自尊感情を高めている生徒たちに「持続可能な社会」を支えるための力として美術科がはぐくませたい力はやはり「コミュニケーション力」である。

美術科においては，自分の思いを語り合ったり，自分の価値意識をもって批評し合ったりするなど，鑑賞の指導が重視されている。また，表現と鑑賞の一体化も求められており，それぞれの活動で効果的なコミュニケーションを設定することで美的コミュニケーション力を高めていきたい。批判的というと好戦的な表現のように感じられるかもしれないが，互いのことを思慮深く考えて建設的な意見を述べ合うことでより刺激的なコミュニケーションを展開させ，感性を磨き高めることができると考え，本研究テーマを設定した。

第２章　研究の実際

１　研究の内容と方法

(1)　生徒の実態把握

【表現活動】制作の発想・構想を練る段階で効果的なコミュニケーションの場面を設定して生徒の表現力について把握する。

【鑑賞活動】対象から受けたイメージをセンスのある表現で伝えられるよう，常日頃から美的コミュニケーションのトレーニングを行うことでコミュニケーション力を把握する。

(2)　論理的に思考し表現する力を高めるための工夫

【表現活動】他者の作品のマイナス要素を取り上げて批判するのではなく，より効果的な表現にするためにプラスすべきことなどを指摘し合うことで，それぞれが自己の可能性に気付くことができるようにする。

【鑑賞活動】対象の内面に迫るべく，思慮深い考えをもってアプローチすることの大切さを伝える。他者の考えに同調するのではなく，あえて逆の考えで対象と向き合うことで多角的・多面的なスタンスで練り合わせる。

(3)　指導の実際

第２学年の【鑑賞活動】においてコミュニケーション力の育成に関する課題と成果を検証した。

２　研究の実際

(1)　生徒の実態把握

第２学年の生徒（159名）全般は，美術科の学習に対して，興味・関心が高く，集中して制作に取り組むことができる。風景画の制作では，いろいろな表現方法を試してみようとする前向きな生徒が多く見られた。また，鑑賞についてアンケートで調査したところ，90％の生徒が「鑑賞

活動の経験がある」と答えており，その中の15％の生徒が「作品に対する自分の意見を発表することが恥ずかしい」と答えている。過去のデータと比較してみると，感じたことを素直に発表することに抵抗を感じている生徒は若干少ないようであり，自分の発表に対してまわりがどのような反応をするのか楽しみにしている生徒も多いように思われる。鑑賞活動における基礎的なルールなどを再確認させるとともに，互いの意見を認め合うだけでなく，高い価値意識で批評し合う態度を身に付けさせる必要がある。

(2) 論理的に思考し表現する力を高めるための工夫

本題材は，「美術作品の造形的なよさや美しさ，作者の意図や表現の工夫を感じ取り，自分の思いや考えを伝え合い，それぞれが互いを認め合う。」ということを主なねらいとしている。このねらいを達成するために，鑑賞の基礎的なトレーニングとして，２作品からテーマに即した作品を１点選ばせ，その作品をなぜ選んだのかを自ら問いかけ，どのような観点から自分がその作品を選んだのかを振り返らせたい。自分が何を感じたのか，何をよりどころとしたのかなどを小集団で伝え合うことで，自分にはない感覚や視点というものを吸収しつつ，互いに認め合うだけでなく高い価値を求めて批評し合うところまで高めることで，新たな気付きを生むことができることを実感させたい。また，そうした過程で学んだことや成長したことを全体で発表することで互いの感性を刺激し合うこともできると考える。

(3) 指導の実際

ア　題材名

あなたはどちらを選ぶ？～造形的な美しさや作者の意図を感じ取ろう！～

イ　題材目標

美術作品の造形的なよさや美しさ，作者の意図や表現の工夫を感じ取り，自分の思いや考えを伝え合おう。

〔本質的な問い〕

「環境白書」の表紙作品として，どちらの作品がふさわしいと考えるか。

〔永続的な問い〕

美術作品における造形的なよさや美しさは，自らの感覚で素直に味わい，形や色彩，イメージなどから感じ取ることができる。その際，外形には見えない本質的なよさや美しさもとらえることが大切である。また，作者の意図や表現の工夫はそれぞれにおいて多種多様であり，作品の形や色彩，材料や表現方法などをよりどころとして自ら感じたことを根拠として読み取ることが大切である。

本題材では，鑑賞における観察力や発想力を身に付けさせるために論理的な思考トレーニングを行わせるが，自分がどのように考えたのか，他者がどのように考えたのかなどをグループで話し合うことで積極的にコミュニケーションさせた。その際に，美的表現を活用したコミュニケーションとなるようキーワードを用意して言語活動を行うように設定した。また，他者の考えを認めるだけでなく，互いに補足をしたり，詳しい説明を求めたりすることで高い価値意識を求める姿勢を大事にさせた。

本時の学習では，生徒が何気なく判断していることにも根拠となるよりどころがあり，価値判断を振り返らせることで自分の感覚を自己理解させた。永続的な理解にたどり着くよう，同じ選択した他者が同様の価値判断ではないことに気付かせ，全く違った考えや視点もあることに触れさせるようにした。そして，グループでの学び合いを通して積極的に自己を開いて他者に働き掛けようとすることができているか，互いに高め合うことができているかを評価することとした。

ウ　指導計画（全２時間）

学　習　内　容	◇評価規準（観点）
美術作品の造形的なよさや美しさ，作者の意図や表現の工夫を感じ取り，自分の思いや考えを伝え合おう。	◇　造形的なよさや美しさ，作者の意図や表現の工夫などに関心をもち，主体的に感じ取ろうとしている。（関心・意欲・態度） ◇　思考の広がりや変化に気付き，修正・改善しようとしている。（鑑賞の能力）

エ　評価目標と評価方法

評　価　目　標	評　価　方　法
①　造形的なよさや美しさ，作者の意図や表現の工夫などに関心をもち，主体的に感じ取ろうとしている。（関心・意欲・態度） ②　思考の広がりや変化に気付き，修正・改善しようとしている。（鑑賞の能力）	◎パフォーマンス課題 あなたは「愛媛大学環境白書」の表紙デザインに採用する風景画を選定する役員の一人です。たくさんの候補の中から最終候補に２作品が残りました。他の役員と意見交換をしたうえで，どちらか１点の作品を選び，選定した理由をレポートにまとめなさい。 ○ワークシート（①②）

オ　パフォーマンス課題のルーブリック

A	B	C
それぞれの作品の印象と自己との対話，異なる視点や感覚など総合的な判断から選定し，その理由をレポートにまとめることができる。	それぞれの作品の印象と自己との対話から選定し，その理由をレポートにまとめることができる。	それぞれの作品の印象から作品を選定し，その理由をレポートにまとめることができる。

カ　本時の指導

(ｱ)　ねらい

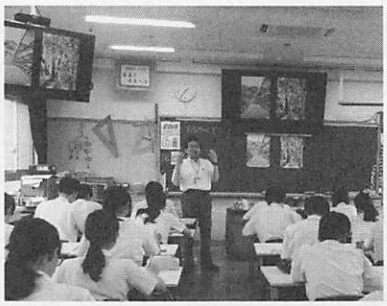
○　造形的なよさや美しさ，作者の意図や表現の工夫などに関心をもち，主体的に感じ取る。

○　思考の広がりや変化に気付き，修正・改善しようとする。

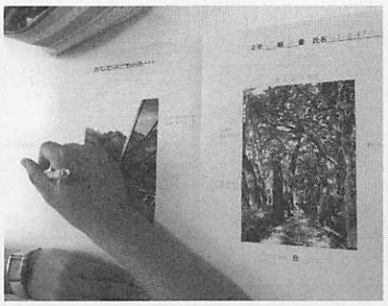
(ｲ)　展　開

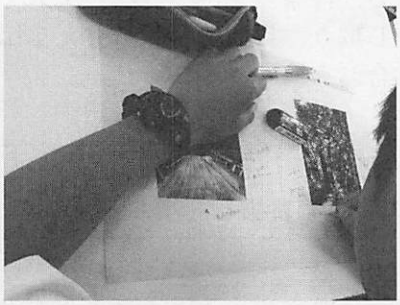
学習活動（学習形態）	時間	○教師の働きかけ	○指導の工夫　◇評価（方法）
1　鑑賞の学習についての説明を聞く。（一斉）	3	○鑑賞活動に基本的なルールについて視覚的に説明する。	
2　二つの風景画作品を鑑賞する。（個人）	7	○形や色彩，イメージなどのキーワードをもとに鑑賞させる。	○違いに着目させるため，それぞれの作品の印象をワークシートに記入させた。
【学習課題】「環境白書」の表紙作品として，どちらの作品がふさわしいと考えるか。			

3　ワークシートをもとにふさわしい作品を選ぶ。（個人）	5	○その作品を選んだ理由を振り返らせる。	○何をよりどころとしたのかを明確にさせるため，ワークシートにチェックをさせた。



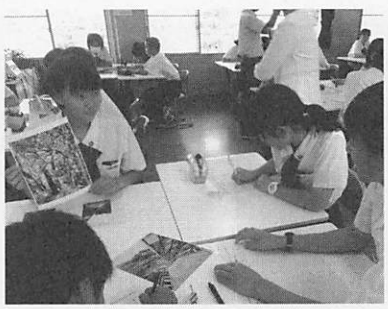
全体での課題説明

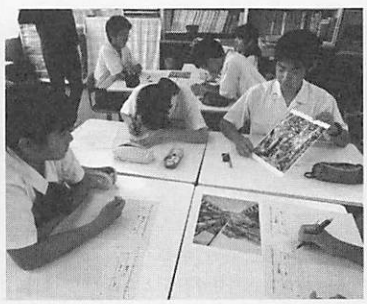


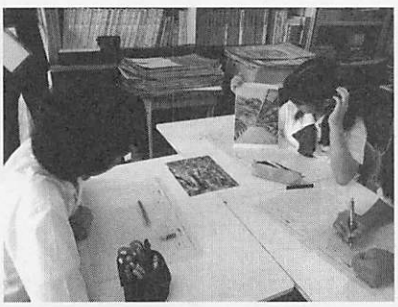


個人によるワークシートへの書き込み

4 グループでそれぞれの意見を確認して話し合う。（小集団）	20	○グループでなぜそれを選択したのかという理由を発表させ，それぞれの理由についての意見交換をさせる。個々の理由についての正当性などについて自由に話し合わせ，班での結論をまとめさせる。	◇安易に同調させないために批判的な意識でも考えるようにうながした。 **○論理的に思考し表現する学び合いをさせるため，結論を一つにまとめさせる際，全員に問答ゲームの型で表現させる。【協同】**







「どちらの作品が表紙としてふさわしいか」小集団での意見交換の様子

		○問答ゲームの主観的や客観的な立場で自分の思考がどのように変化したかをワークシートに記録させる。	○思考の広がりや変化を振り返らせるために，話合いを要約してワークシートに記録させた。 ◇思考の広がりや変化に気付き，修正・改善しようとしている。（ワークシート）

5　班での話合いによってまとめた結論を全体で発表する。　（全体）	10	○自分の最初の考え，グループでの話合いの様子，最終的な選択について発表させる。	○発表者がより豊かな表現で発表できるよう，聞き手がリアクションなどしっかりと反応するようにさせた。
6　次時の活動について知る。　（一斉）	5	○次時の発展的な課題を提示し，次時も主体的に取り組むようにと伝える。	

キ　生徒の学びの実際

生徒に２作品を鑑賞させたところ，ほとんどの生徒がそれぞれの作品から造形的なよさや美しさ，作者の意図や表現の工夫などを主体的に感じ取ろうとする姿勢が見られた。作品を選択する過程で，生徒自身が“どのような価値判断から選択したのか”を振り返らせることで自らの感覚を客観的に捉えさせたが，約20％の生徒は，「好き」「嫌い」という主観的な価値による選択が見られた。そうした生徒には，「どういったところから好きと感じたのかな？」「こちらの作品の方が好きと感じた理由は？」といった本来なら自問自答すべきことを教師が追質問することで自分の内面を向き合わせるように働きかけた。

残りのおよそ80％の生徒は，自分の内面と向き合い，自分がその作品の“どういったところに魅力を感じたのか”を分析することができていた。そうした生徒には，「自分が惹かれた理由をグループでうまく伝えるためにはどうすべきかな？」「相手を納得させる材料を探してみよう！」といったアドバイスを与えた。

グループでの活動の際には，「質問者」「解答者」「記録者」など主観的な立場や客観的な立場で「問答ゲーム」を行い，自分たちで思考がどのように変化したのかを気付かせるようにした。ルーブリックの自己評価でＣだった生徒の多くには，「自分が感じたことを説明する友達のプレゼンテーションはとても分かりやすく，なるほどと思った。」と次につながるコメントが見られた。また，ルーブリックの自己評価でＢだった生徒にも「最初は，自分の考えを相手に納得させようと思っていたけど，自分と違う考えを冷静に聞いてから考えると新しい見方で作品と向き合うことができた。」といったコメントが見られた。

作品を介してのコミュニケーションという鑑賞活動がもつ本来の学びのきっかけにすることができたと思う。このような活動は，鑑賞活動のみではなく表現活動にも取り入れ，発想・構想を練る段階でも大いに役立たせることができるだろう。今後ともこうした練り合い高め合う活動を定期的に設定し，批判的思考から論理的思考へ発展させ，そして創造的思考へとつなげることで美術科が求める豊かな感性を育んでいきたい。

第３章　おわりに

研究テーマを「批判的に考え……」と設定してことで批判的思考を中心に据えているように思われてしまうかもしれないが，美術科としては創造的思考へとつなげていきたい。そのためには，本校の研究主題をベースにして他教科との兼ね合いを図りながら，相互に高め合うことでより各教科が求める永続的な問いへつなげていく必要がある。美術科においては，自己と客観的に向き合うことが不可欠であり，そのためには記録を蓄積する必要がある。ポートフォリオやＩＣＴを活用することで客観的なデータ蓄積にも取り組んでいきたい。ただ，高度情報化社会の現代においては，インターネット等で大量な情報を収集することが可能であるが，ＩＣＴを活用して得ら

れる情報はあくまでも擬似的なもの（ヴァーチャルリアリティ）であり，本物に優るものはない。本物に触れる経験や五感で感じる体験を大切にすることを私たち教師がしっかりと認識し，直接体験を疎かにしないように生徒たちに訴えかけなければならない。

今後は，効果的なコミュニケーションの機会を表現活動と鑑賞活動のそれぞれにおいて設定し，より生徒の感性を刺激していきたい。

引用・参考文献

文部科学省（2011）「言語活動の充実に関する指導事例集 ～思考力，判断力，表現力等の育成に向けて～【中学校版】」